

地ひびき



木もれ日の小川

濁川 徳一

318号

「わが町」

丸岡 稔

私が、ここ長岡市に移り住んで、もう50年が過ぎました。

元々越後生まれの越後育ちですが、大学は仙台、卒業後は北海道に10年近く住んでいました。その中の七年間は、「等身大の自分史」の伊藤さんの故郷である夕張市の炭鉱病院に勤めて、ここで豊富な臨床経験を積むことが出来ました。当時の夕張は人口11万余りで活気もあり、炭坑という特殊な環境から、人々は互いに運命共同体とというような意識があり、あけっぴろげで、優しく、助け合って生きていました。やがて、エネルギー革命により炭坑産業に陰りが見え始めるのですが、伊藤さんの「自分史」を読んでいて、当時の風景や人間模様が目に浮び、胸が熱くなるのを覚えるのです。

私が尊敬していた院長の有賀文夫先生の言葉は、今も身体の中に楔のように突き刺さっています。仲間と待遇改善を要求し、いろいろな理屈をこねた時ですが、「医者とは、すぐに人のいのちを預かっているのだからと言うが、バスの運転手だって、汽車の運転手だって同じじゃないか。思い上げるな！」と一喝されました。どんな職種でも、みんな人のいのちと関わっているのだということに気付かされたのでした。

その後、母校の大学に戻りましたが、再び北海道は函館の市立病

院に赴任しました。この美しい街で、多くの友人と絵の仲間と出会い、永住を決意したのですが、昔の中学、高校と同級だった男から「一緒に故郷で理想的な病院をつくろう」と誘われ、故郷には老いた父と、姉も妹も居るので、「お前は親孝行したか。おれが親孝行をさせてやる」という友人の殺し文句に参ってしまったのです。

24年間、一緒に仕事をしたのですが、自分が考えていた理想は実現されず、26年前に彼と別れ、独立したのでした。

私の住むここ宮内地区と呼ばれる所は、私が来る2、3年前に長岡市と合併していますが、上越線と信越線と分かれるところで、独自の長い歴史と文化を持ち、醸造の町としても有名で、今も数多くの酒造会社や、味噌醤油の会社があります。現在はこの地区だけで人口は2万3千人程で、この町に私は半世紀を過したというわけで、ここでの生活は、密度の深いものになっていました。

病院勤めの時も、独立開業してからも、地区の人は変らぬ気持で接してくれて現在に至っているのですが、有り難いことでもあります。今年の9月初めのある日、地区の社会福祉協議会から、一人の女性が訪ねて来ました。今度出る「福祉だより」の「ご長寿の方を訪問して」という頁に、私の記事を載せたいというのです。「私はまだ80代ですよ。半年足らずで90にはなりますが……」と言うと、「女性が多いが、男性が居ないのです」ということなんだそうです。「私は以前、何度も先生に診て頂きました」とその方から言われ思い出しました。そして、この人に今の私の気持を是非聞いてもらいたいと思いました。

以下、その後間もなく発行された全文を載せさせて頂きませんが、広い地区だけに、多くの方の反響があり、沢山の方に声をかけて頂きました。内容の一部は「地ひびき」にも書かせて貰ったものです。「丸岡様は、多感な少年期は、戦争真っ只中。17才で海軍経理学校に進まれ、在学中に終戦。絶望の中帰郷され、しばらくは、虚脱状態の日が続いたそうです。」

長寿の秘訣をお訊ねすると、歳をとると体力が衰えるのは当り前の事である。出来なくなつたことを嘆くのでなく、今出来ることを考えると、自分にはまだまだ可能性が多いことに気付き、前向きに生きる意欲が生まれ、身体が自然についてくる。それが元気で長生きの秘訣だそうです。現役で医師という大変なお仕事を続けておられ、お忙しい日々ですが、暇ができると車を運転され、野外にスケッチに出かけられ、家庭菜園や庭の草取りもお好きとのこと。お仕事や作業の後、晩酌は何よりの楽しみだそうです。

最後に、若者への提言をとお願ひしましたら、「挫折を怖れるな、挫折を経験することに人は逞しくなれる」「時には、お腹と背中がくっつくような空腹を体験することも必要である。そこから、飢餓や貧困に苦しむ人達への思いやりが生まれ、今の自分の幸せに気付ける」「自然にできるだけ密に接する機会を持つこと。そこから命の尊さを教えられる」「人間も自然の生きもの。自分の中の野性を復活し、大いに恋をすべし。ただし、相手を傷つけるようでは人間失格！」と語られました。」